

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

法隆寺大鏡



第十二集

始



法隆寺大鏡第十二集挿圖解説

第十二、第三十一、金堂 玉蟲厨子

斗拱 龍首西密院繪繪
須彌座正面密院繪繪 同右側面密院繪繪
同左側面密院繪繪 同背面密院繪繪
同上部反花 同佛所密院繪繪文様

(前集解説の續き)

二、厨子の構造形式

厨子は宮殿^と須彌座の二部より成る。宮殿は上にありて形態齊整優雅の風を帯び須彌座は之を承け稍堅實の趣をなせり。宮殿は方一間單屏にして地上に立ち、正面に階あり、正面及左右側に各屏二枚を設けたり、更に局部に就き之を觀るに、障には狹間形を作り柱は方に斗拱は血板を有せる大斗と雲形肘木とより成り、形式金堂の者に近く、流暢にして強健なる曲線を應用せり、軒は一軒にして圓垂木を有せるは他の時代に無き所なり、屋蓋は瓦葺俗に行基葺と稱する者を換し入母屋造なれども雨下と四注とを上下に重ねたるは珍しく、大棟の兩端に金銅の鳩尾を上げたるは更に貴ぶべし、此鳩尾の一は早くより失はれ遺れる者も近年烏有に歸せるは惜むべし、而も幸に精巧なる模造の有せるあり充分當初の手法を徴するに足れり。須彌座は亦上下の二部に分つべし、上部は高くして腰細く上下に豐肥なる蓮瓣あり以て更に其上下の段狀をなせる板に連絡せり、下部は臺座にして低く且廣く四隅に穩健なる列形を有せる脚あり。

三、飾金具

宮殿須彌座の屋蓋及壁面を除き其他の構材の外側面及木口には大抵

漆地の上に金銅透彫の金具を裝せり、特に宮殿には其下に玉蟲の羽を伏せたり今猶往々之を辯すべし、其金具は最雄勁奇矯なる曲線より成れる一種の唐草文を透彫にせる者にして、此金色燦然たる金具の間地より玉蟲の羽か靈怪なる光を放ちし當初の美觀果して如何なりけん、宮殿の内部の壁及扉裏には金銅押出の千佛像板を裝せり、是れ天平十九年の本寺資財帳に載せたる宮殿像貳具一具金銀押出千佛像といへるに相當せる者ならん。

四、繪畫

宮殿及び須彌座の四面には、黒漆地の上に密院繪にて諸種の圖像を畫けり、即ち宮殿正面の扉には二天の像をあらはし、左右側面の扉には各兩菩薩の像を寫し、背面の壁には多寶塔の圖を作れり、又須彌座の正面には舍利供養の圓左側面には金光明經捨身品の捨身飼虎の圓右側面には涅槃經聖行品の施身開偈の圓背面には須彌寶山の圖を描きたり、宮殿正面の扉に圖せる二天は、風貌温雅にして姿勢悠揚他の時代の忿怒相をあらはせる者と異なりて、隻手鎧を携へ隻手鐵頭を有せる劍を持つ鎧甲亦一の特徴あり、鬼形は其前古にして、唯裸形の人物の如き者を描きたるに過ぎず。側面の扉に描かれたる菩薩像は、面相温和にして少く中央に對し傾欹の姿勢をなせるは、既に狹待の意をあらはせる者にして當代此種彫刻の多く直立不動なる者に似ず、隨て優雅の氣象に富めり。背面多寶塔圖は、先中央に突元たる山岳を寫し、上に三塔あり、挺立す塔中各佛ありて座せり、又山腹の岩窟中に四羅漢あり、上には日月懸り、右には雲中に天人供養し、鳳凰飛翔せり、圓様簡なれども筆力強勁なり。

特に其鳳凰は金堂天蓋の木形鳳凰と同様式にして、又よく支那南北朝式と同型たることを示せり。

須彌座の左側面は捨身飼虎の圖にして釋迦過去の世に摩訶羅陀王子の第三子たりしとき、竹林中に於て一乳虎の七子を懐き飢饉に迫れるを見衣を脱し山上より投下して虎餌となりし所の意を寫し出せる者なり、即ち上段には王子衣を脱し樹に懸くる處中段には王子投身天華亂れ墜つるの處下段には竹林中に於て王子虎に喰はるゝの狀を描き異なる時間的現象を一圖に收めし者にして、是れやがて後世傳記的繪畫物の先驅をなせる者なり。

須彌座正面の舍利供養の圖は、悉くは同捨身品阿難等が前記王子の眞身舍利を敬禮せる所をあらはせる者ならん、中央臺上に舍利壺を安んじ左右に靈燈之を設けり、羅漢燃香禮拜し上に香爐あり蓋燵上昇し雨天人相對して讚歎するの狀を描き出せり。

須彌座の右側面は施身開傷の圖なり、即ち釋迦が過去の世婆羅門たりし時雪山にありて難行苦行す、帝釋天之を試みんと欲し、身を變して羅刹となり其前に至り、過去佛所説の半偈諸行無常、是生滅法を説きしに、婆羅門其身を羅刹に與ふることを約して、生滅滅已、寂滅爲樂の後半偈を聞き、岩石其他あらゆる處に此偈を書き寫し終りて高樹に上り投身せしに羅刹忽ち帝釋に復し空中に於て之を支持せりと云ふの意をあらはせる者なり、圖中下段には婆羅門羅刹と問答する處、中段には偈を岩壁に書寫する處、右方には高處より投下せるを帝釋の支持せんとするの狀を寫せる者にして、是れ亦左側面の圖と同く時間的經過の現象を一圖中にあらはせし者なり。

須彌座の背面には大海上に須彌寶山の圖を作り、下に幡龍あり上に日月懸り瑞雲飛ひ妙華飄れり、下方に鳩尾を上げたる佛殿あり釋迦内に跌座し兩菩薩侍立せり、又左右に鳳凰を描きたり、是れ金光明經讚佛品に諸菩薩過去捨身飼虎の説話を聞き釋迦の無量功德を讚歎して大海須彌寶山の如しと曰へるの意を寫せし者か。

今此厨子に施されたる繪畫を見るに、朱綠青雌黃黄土の如き顏料を油と其乾燥劑たる密陀僧とに混和せる者を以て書きし者にして、一種の油畫とも稱すべく、周回精緻の筆致を示すには困難なりしなるべく、之を以て普通の繪畫と同一に論ずること能はざれども、當時の繪畫の實例の殆存せざる今日に在りては最も貴重なる資料にして、蓋我國に遺存せる最古の繪畫を以て目すべき者なり。

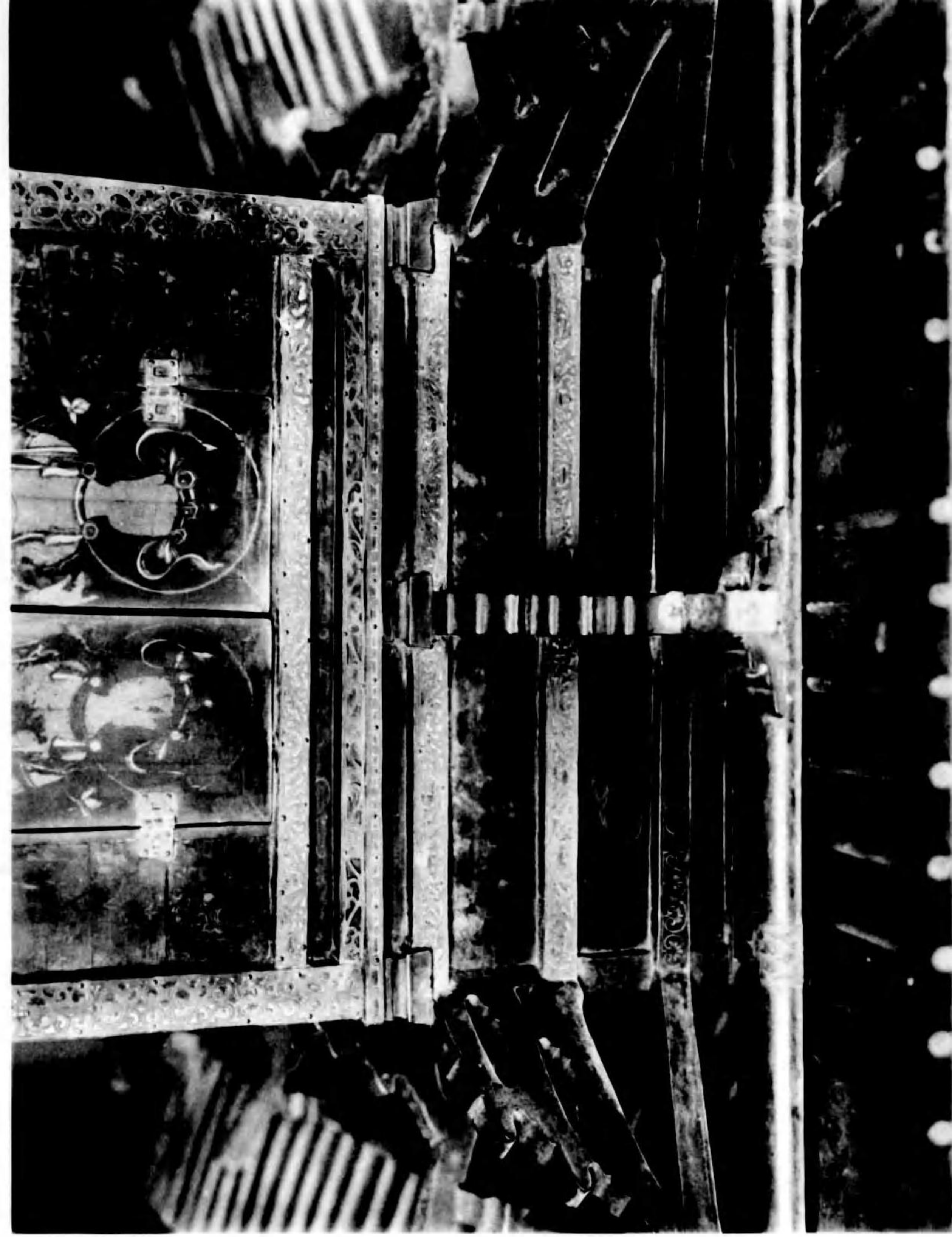
此等の繪は、其構圖に於て其描法に於て右拙たることを免かれざれども、岩石樹木龍鳳飛雲等を寫して筆力奔放自在、最も雄健の特色を發揮し、以て骨法用筆を重ぜし六朝時代繪畫の一斑を窺ふに足るべき者なり。

五、密陀繪文様

厨子の前記飾金具及繪畫の無き處には密陀繪を以て諸種の文様を描けり、宮殿扉の左右壁面には一種の葉樹に蔓草の纏ひたる者を作り上に雲中妙華をあらはせり、手拱間の壁には下に山岳狀上に天人を書きたり、其上の通肘木に希臘風忍冬文様を並列せるは特に感興を惹くに足れり。

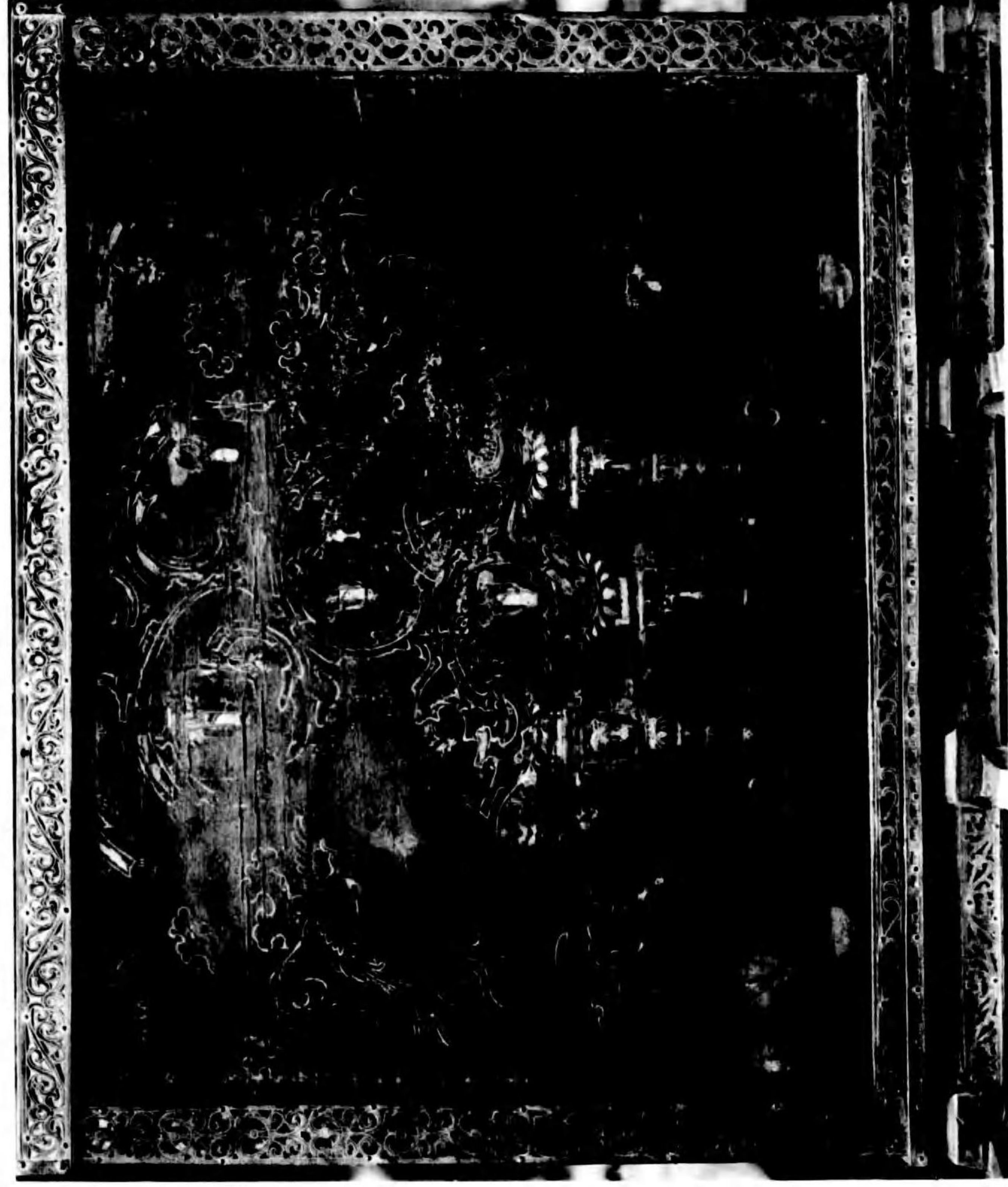
須彌座上下の蓮瓣には皆一種の忍冬文あり、其上下の段狀をなせる板の平面にも道勁雄健の唐草文を作り、臺座の上面亦然り、特に列形を

有せる脚には便化せる龍頭を描き奔放飛動の勢をなせり
要するに此等密陀繪の文様は飾金具の文様と共に飛鳥時代の最種類
に富み最變化の妙を極めたる文様を代表する者にして、一は我古墳よ
り發掘せられし劍頭馬具等に施されたる文様と深縁を有し、一は今日
支那に存在せる南北朝時代の者と多少の連絡を有せるは頗注目すべ
き事に屬す。



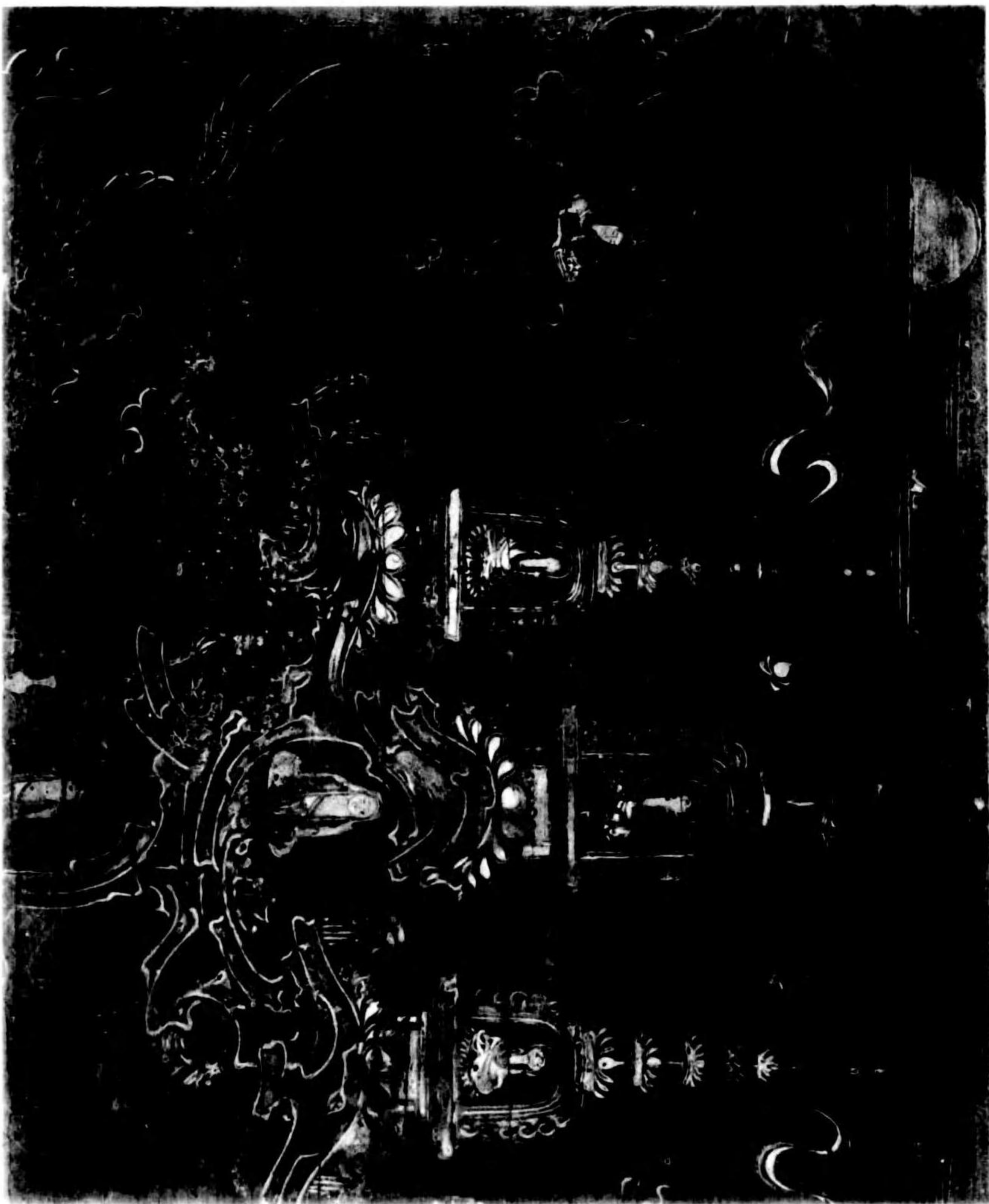
全玉册子图二十第

繪佛聖菩薩三子玉童玉女



上海圖書館藏

繪作陀密面青龍 四十四 子別蓋王受金



繪作陀密面青龍





繪畫地宮面正神廟項六十四子屋慈玉堂全

全堂慈子屋六十四項神正面宮地繪

李可染画 王羲之草书局部



李可染画



繪畫隱密而正身細須 子明畫玉堂

子明畫玉堂



李公麟《五马图》局部之一



全王也男十二第
 石中側面圖附

全王也男十二第 石中側面圖附



全堂王祖子一壇地右偶面密繪

全堂王祖子一壇地右偶面密繪



國立歷史博物館



繪世龜密面側左座彌須三子星燕玉令全

繪世龜密面側左座彌須三子星燕玉令全



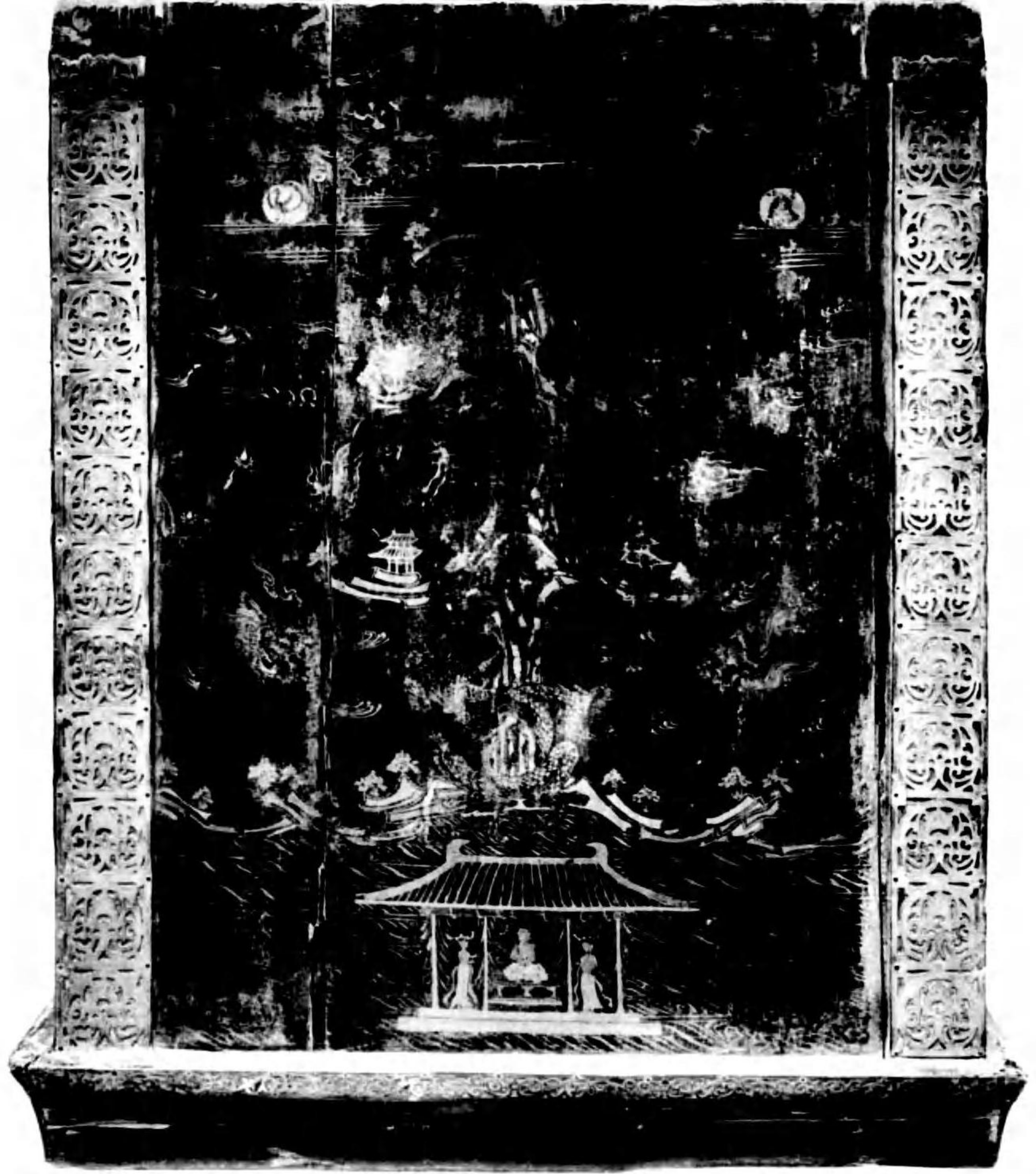
全王墓所出
战国时期
人物俑

全王墓所出战国时期人物俑



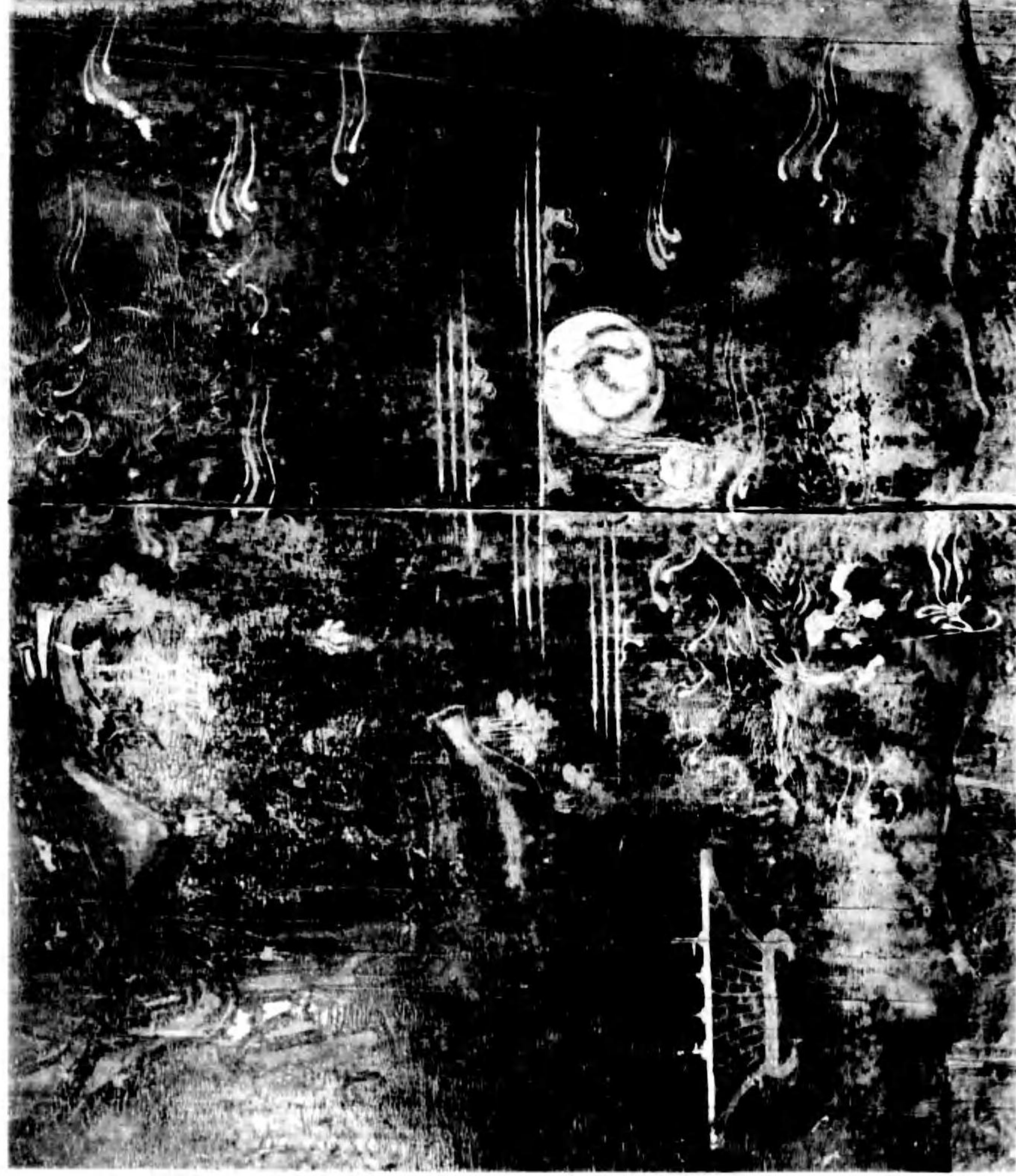
敦煌莫高窟西壁第45窟千手千眼觀世音菩薩

莫高窟西壁第45窟千手千眼觀世音菩薩

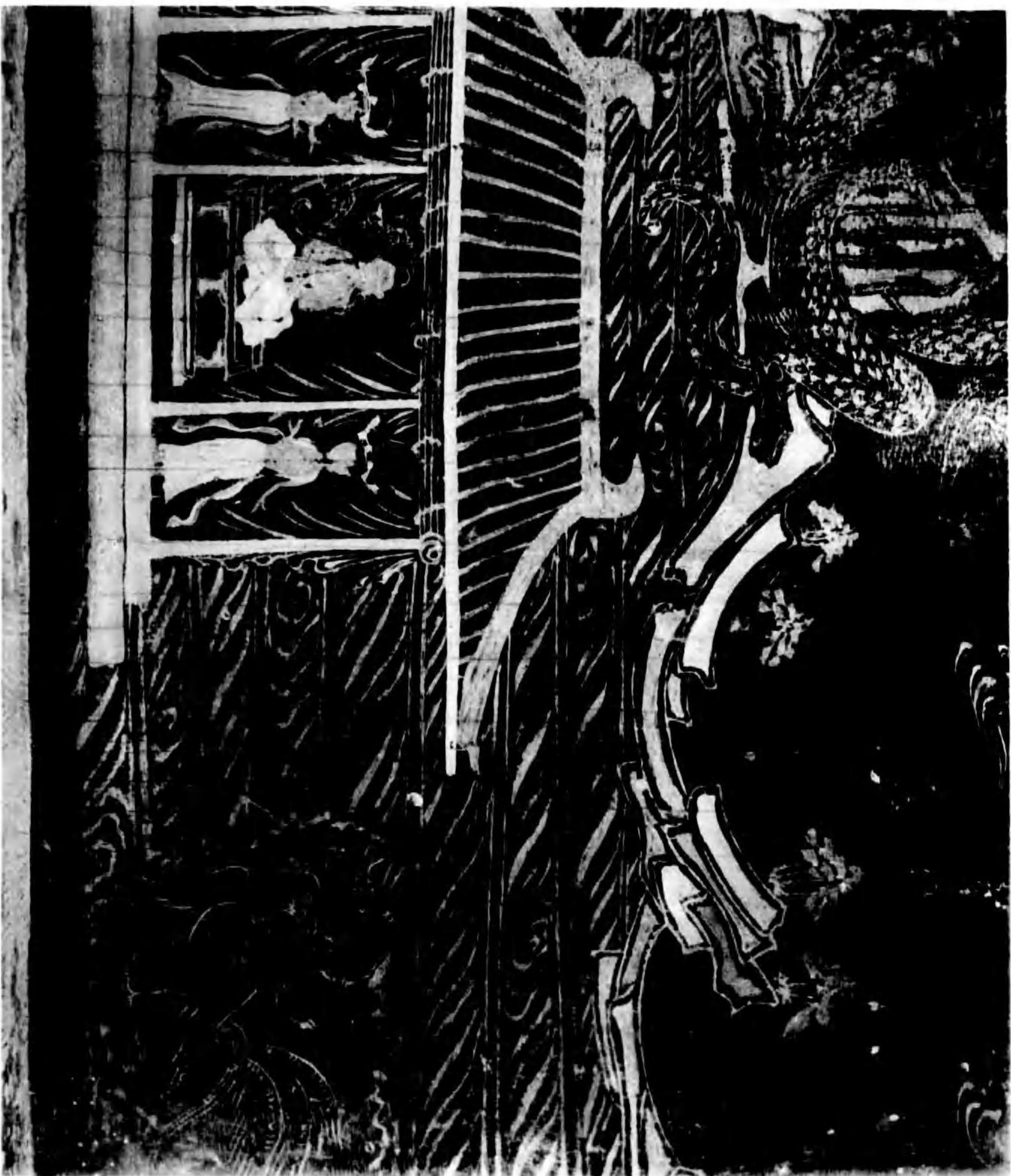


全字王墓子山三石碑面背刻

石



明倫彙編



繪僧院宮面青磚須彌子明殿五零全

繪僧院宮面青磚須彌子明殿五零全



南京博物院藏



全堂丁子「玉」璋中璋密印世物繪文

全堂丁子「玉」璋中璋密印世物繪文



其文拾遺卷密脚亭座細須：增五子引蘇玉堂全



大正三年十月十七日印刷
大正三年十月二十日發行

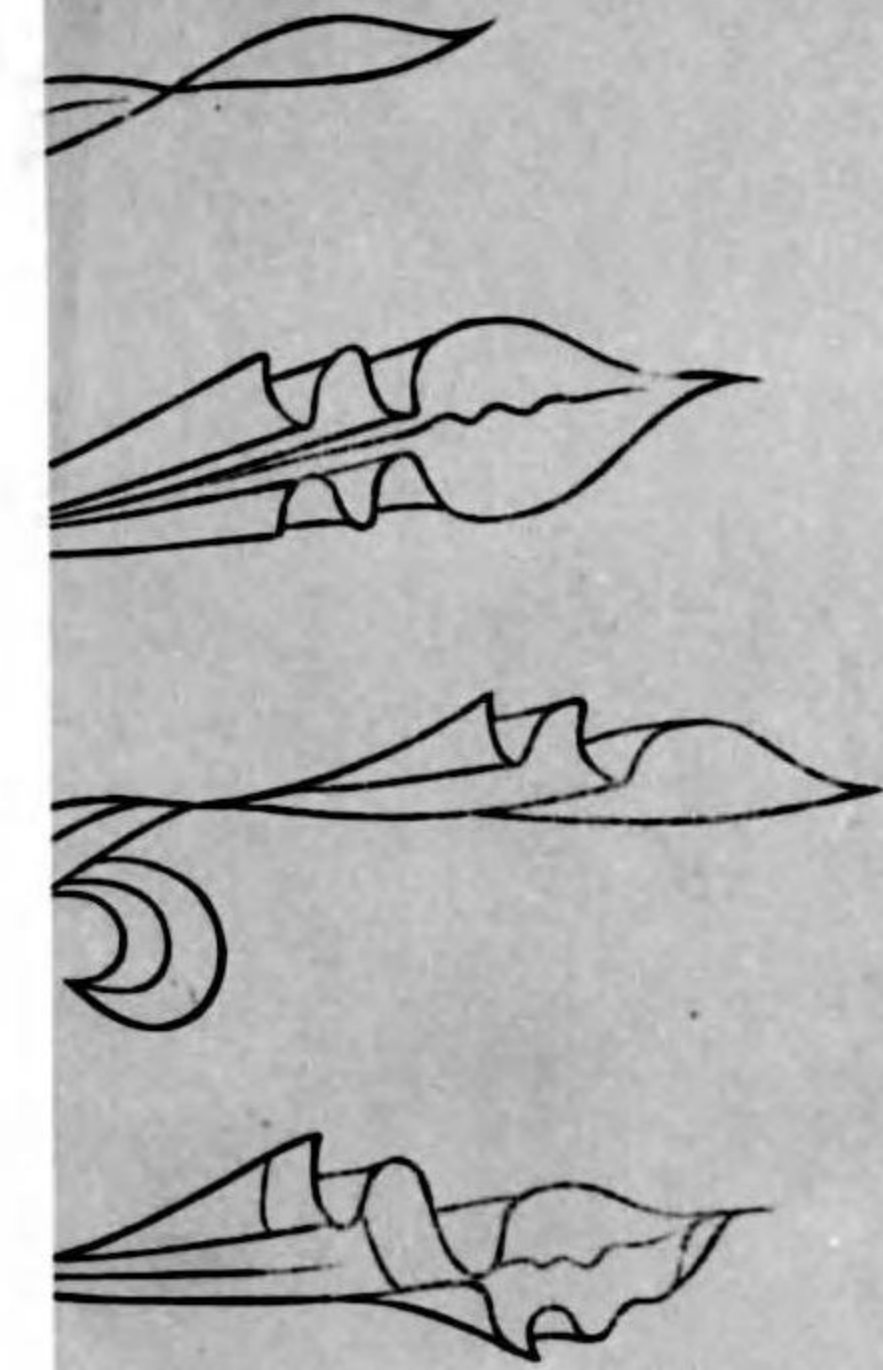
大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地
白石村治

印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地
武田勝之助

發行所 東京市下谷區中根岸町六十八番地
墨彩堂

39-11



終